

Press Release

令和3年2月19日

報道機関 各位

東北大学大学院教育学研究科
北海道教育大学釧路校
日本ブリーフセラピー協会

妊婦・不妊治療患者の新型コロナウイルスへの感染不安 —不安を高める要因が明らかに—

【発表のポイント】

- ◆ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況下において、日本の妊婦が抱えている感染不安の高さや、感染不安に影響を与える要因が明らかになった。
- ◆ 妊婦と不妊治療患者は、どちらも高いレベルの不安を抱えていた。
- ◆ 買い溜めなどの備蓄行動が妊婦の新型コロナウイルスへの不安を高める。
- ◆ 体調チェックなど、日々の自身の健康をモニタリングする行動も妊婦の新型コロナウイルスへの不安と関連する。
- ◆ インターネットや SNS からの情報を重視している妊婦は、新聞やテレビ番組などの従来型のメディアからの情報を重視している妊婦に比べて、新型コロナウイルスに対する不安が低い。

【概要】

日本国内で新型コロナウイルスの感染者が確認されてから1年以上が経過し、多くの人が生活様式の変更を余儀なくされています。これは、妊婦や不妊治療を受けている患者も同様ですが、妊婦・不妊治療患者の新型コロナウイルス感染に関わる心理学的な研究は十分に行われてきませんでした。

北海道教育大学釧路校 浅井継悟 准教授、東北大学大学院教育学研究科 若島孔文 教授を中心とする研究グループは、妊婦・不妊治療患者を対象にした新型コロナウイルスに対する不安についてのアンケート調査を行いました。本研究では当研究グループが翻訳した、新型コロナウイルス恐怖尺度 (Fear of COVID-19 Scale) を使用し、妊婦・不妊治療患者の新型コロナウイルス感染不安を測定しました。305名の妊婦・不妊治療患者のデータを分析した結果、妊婦、不妊治療患者共に新型コロナウイルスへの不安は高いものの、妊婦においてその傾向がより顕著でした。妊婦に関してより詳細な分析を行った結果、買いだめ行動、自身の健康をモニタリングすること、最も重視する情報源の3つが、COVID-19への不安と関連していることが明らかになりました。

この研究成果は、2021年2月に Journal of Affective Disorders Reports に掲載されました。

【詳細な説明】

新型コロナウイルスによる感染症(COVID-19)が世界規模で広がり続けています。また、COVID-19に関連した心理的な問題も、パンデミックの広がりに伴い増加しています。パンデミックによって引き起こされる最も注目される心理的問題の一つは、感染症に対する不安です。

特に妊婦は、他の人とは異なる懸念を持っています。COVID-19が、実際に流産や死産のリスクを高めるのか、あるいは子供に垂直感染するのかは未だ明らかにはなっていません。しかしながら実際に、様々な国において、妊婦が感染を恐れて医療施設を訪れることを控えていることが示されています。また、中国の妊婦を対象とした研究では、パンデミック状況にある妊婦の知覚されたストレス、抑うつ、不安は、通常の妊婦よりも高いことが示されています。

また一方で、不妊治療を受けている人の治療の遅れについても懸念されています。海外の調査では、パンデミックが進行中であった2020年4月のストレス要因を調べたところ、いずれの場合も不妊がトップのストレス要因となっていました。平時でも不妊治療というストレスに直面している女性は、パンデミックの下では、治療の遅れなどの追加的なストレス要因に直面していることが考えられます。

さらに、日本では、パンデミックの影響で妊婦を取り巻く社会環境も変化し、企業が妊婦に出勤を強要したり、大都市に住む妊婦には地元での出産を控えるように求められたりしています。不妊治療については、不妊治療を行っている医療機関の約9割が「患者数が減少している」と報告しています。そのため、不妊治療患者は、感染症のリスクを減らすために治療を先延ばしにすることや、先延ばしによる妊娠の機会損失というジレンマに直面しています。

このような社会的背景があるにもかかわらず、妊婦・不妊治療患者の不安に関する研究はこれまで行われてきませんでした。本研究は、日本の妊婦・不妊治療患者のCOVID-19に対する不安を明らかにすることを目的としました。

調査では、オンラインサービスを利用して、2020年5月19日～6月6日の間に任意で回答を求めました。回答のうち、有効回答の妊婦292人(23～42歳、平均年齢=31.18)と不妊治療患者13人(33～43歳、平均年齢=37.69)の回答を分析しました。新型コロナウイルス恐怖尺度を用いて、妊娠・不妊治療患者のCOVID-19に対する恐怖心を測定しました。また、COVID-19に対処するためにどのような行動をとっているか、参加者の人口統計学的特徴(年齢、喫煙、家族との同居)と危険因子(現在の健康状態、治療中の疾患、就労状況、前月の家族のコミュニケーション、前月の家族の葛藤、最も重要な情報源、居住地域(都道府県)での感染者の有無、感染者の知人の有無に関する質問が本調査に含まれていました。また、買いだめ行動や健康モニタリング(健康管理など)を測定する項目についても調査しました。

分析について、日本人の妊婦とイランにおける妊婦の不安に関するデータとの比較のために t 検定を実施しました。その結果、日本の妊婦の不安のスコアはイランの妊

婦よりも有意に高いことが示されました($t(577.49)=15.50$ 、 $p<.001$)。

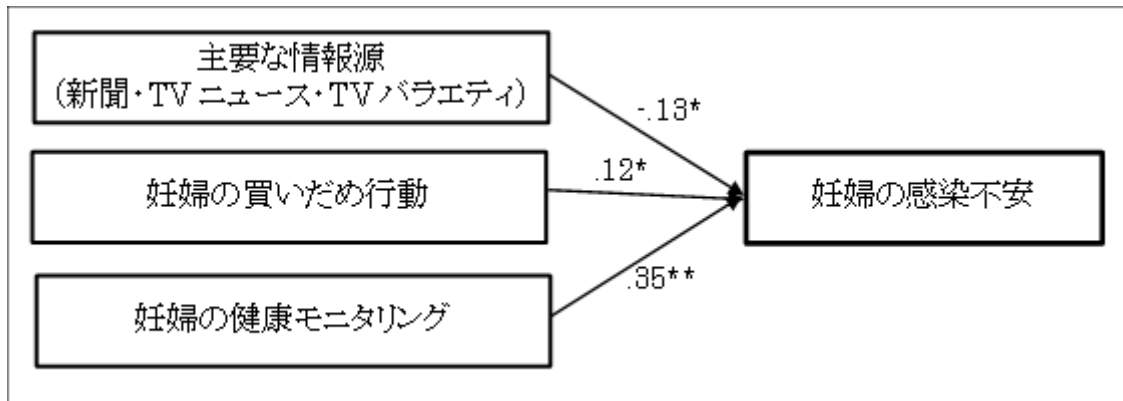
また、各変数と不安との関係を明らかにするために重回帰分析を行いました。その結果、明らかになった新たな知見は以下の3つです。

- ①買い溜めなどの備蓄行動が妊婦の新型コロナウイルスへの不安を高める
- ②体調チェックなどの日々の自身の健康をモニタリングする行動も妊婦の新型コロナウイルスへの不安と関連する
- ③インターネットや SNS からの情報を重視している妊婦は、新聞やテレビ番組などの従来型のメディアからの情報を重視している妊婦に比べて、新型コロナウイルスに対する不安が低い。

買いだめ行動は、妊婦の間で COVID-19 に対する不安を高めることがわかりました。アイルランドの妊婦を対象とした調査でも、多くの妊婦が買いだめをしていることが報告されているため、買いだめは文化を超えて起こる行動であると考えられます。健康モニタリングは、一般市民と妊婦の健康を守る上で重要な対処戦略ですが、本研究の結果は、妊婦の健康モニタリングと COVID-19 への不安との関連を示唆しています。したがって、妊婦に対して自己予防策の情報提供を行う際には、感染予防策の情報提供だけでなく、妊婦の心のケアについても情報提供を行う必要があります。

さらに、新聞やテレビの情報を最も重要な情報源と考えることは、新型コロナウイルス恐怖尺度と有意かつ負の関係がありました。インターネットや SNS を重要な情報源とみなす人は、新聞やテレビを重要な情報源とみなす人に比べて不安感が低いことが明らかになりました。SNS やインターネットを使えば、自分が必要な情報にアクセスできます。そのため、ソーシャルメディアを利用した妊産婦ヘルスケア情報の発信は、妊婦の不安の減少に寄与する可能性があると考えられます。一方で、新聞やテレビは幅広い読者・視聴者を対象としているため、妊婦には関係のない情報が入ってきます。そのため、新聞やテレビなどの伝統的なメディアは、妊婦の不安を高めていると考えられます。

本研究の結果をまとめると、日本の妊婦は他国の妊婦に比べて不安感が高いことが明らかになり、妊婦の不安は、重視している情報、買いだめ行動、健康モニタリングとそれぞれ関連していることが明らかになったと言えます。



【参考図】本研究で示された妊婦の感染不安の構造
 数値は重回帰分析における β 値を示しています。* $p<.05$, ** $p<.01$ になります。

【論文情報】

Title: Fear of novel coronavirus disease (COVID-19) among pregnant and infertile women in Japan

Authors: Asai, K, Wakashima K, Toda S, Koiwa K.

日本語タイトル: 日本における妊婦および不妊治療患者の新型コロナウイルスへの感染不安

著者: 浅井継悟・若島孔文・戸田さやか・小岩広平

掲載誌: Journal of Affective Disorders Reports

DOI: <https://doi.org/10.1016/j.jadr.2021.100104>

【問い合わせ先】

(研究に関すること)

東北大学大学院教育学研究科

教授 若島 孔文(わかしま こうぶん)

電話番号: (022) 795-6139

E-mail: kobun.wakashima.d3@tohoku.ac.jp

(取材に関すること)

東北大学教育学部・教育学研究科総務企画係

電話番号: (022) 795-6103

E-mail: sed-syom@grp.tohoku.ac.jp